

(1) 学習指導

ア 学習指導要領の適切な実施

《小学校》 ～学校体育のさらなる充実に向けて～

- 1 「知・徳・体」にわたる「生きる力」を育むための指導
体育は、「知・徳・体」すべてをバランスよく育むことができる教科であり、その特性や良さを十分発揮した授業の実践を行う。
- 2 「運動の楽しさに触れ、その行い方を知り、動きを身に付ける授業」の一層の充実
知識及び技能の目標である「運動の楽しさに触れ（喜びを味わう）、その行い方を知るとともに、基本的な動き・技能を身に付けること。」に基づいた授業の実践を行う。
 - ① 運動の楽しさの追求
 - ・「運動の特性に応じた楽しさ」と「児童の実態に即した楽しさ」
 - ② 指導内容の明確化
 - ・指導内容を確実に把握する。
 - ・目指す児童の姿を明確にする。
 - 学習の before → after をイメージした授業（ゴールイメージをもつ）
 - ③ 個に応じた指導の工夫
 - ・運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童へのアプローチ。
 - ・誰もが安心して学習に取り組めるようにする。
 - ④ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
 - ・体育科で求められる資質・能力の育成や体育の見方・考え方を豊かにするための授業改善を進める。
- 3 6年間の見通しをもった年間指導計画の作成
 - ・「カリキュラム・マネジメント」の視点に基づいた年間指導計画を作成する。
 - ・2年間を大きな単元と捉え、それぞれの学年で何を指導するのかを明確にする。
 - ・指導内容と前後の学年との系統性を整理する。
- 4 指導と評価の一体化
 - ・課題把握→計画→実践→評価→改善のサイクルで評価の内容を次の指導に生かす。
 - ・何を評価するのかを明確にした指導計画を作成する。
 - ・児童の学習活動の中に学習を「見通す」「振り返る」活動を取り入れる。
 - ・教師による賞賛や励まし、価値付け等の意図的・計画的な指導を行う。
- 5 言語活動の更なる充実
 - ・言語活動が目的ではなく、指導の充実を図るための手段であることを考慮する。
 - ・体を動かすことを通して、言語活動の充実を図る。（運動量に配慮する。）
- 6 ICT機器の効果的な活用
 - ・知識及び技能の習得に資する映像資料、自分や仲間の動きの分析等、思考・判断・表現を促す資料として活用する。
- 7 体育・健康に関する指導 ～学んだことを実生活に生かす～
 - ・体育の学習が運動の日常化につながるような方策を講じる。
 - ・運動領域と保健領域との一層の関連を図る。
 - ・「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」等の結果を有効活用する。
- 8 保幼小の円滑な接続
 - ・幼児期運動指針を参考に、小学校低学年の体育において、楽しく行い、適切な運動量を確保しながら、多様な動きが獲得できるようにする。

《中学校・高等学校》 ～学習指導要領の趣旨及び内容を踏まえた指導～

1 生徒の実態を踏まえた授業改善

- ① 運動やスポーツに好意的な感情を維持しつつ、「できた」が実感できる授業づくり
- ② 生徒が課題を発見し、仲間と課題を解決するとともに、次の課題を発見することができる授業づくり
- ③ 生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現・継続する資質や能力の育成
 - ・体力や技能の程度及び性別の違いや障害の有無等にかかわらず、仲間とともに学ぶ体験や運動の多様な楽しみを共有することで生涯スポーツに向けた資質を養う。
 - ・「原則として男女共習」での授業実践。
 - ・授業外でも実践する意欲（態度）の充実・・・自ら進んで運動やスポーツに取り組むことができる資質や能力を育てることで、生涯スポーツにつなげる。
 - ・運動習慣の形成につなげる保健分野の学習改善（体育分野と保健分野の連携）。
- ④ 「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」等の結果を有効活用する。

- ### 2 3年間を見通した指導計画を作成する「入学時の生徒の実態」→「最終的なゴールイメージ」
- ・指導内容の確実な定着を図る観点から中学校第1学年及び第2学年の2年間において、領域を弾力的に取り上げ、全ての領域を履修。
 - ・中学校第3学年においては、各学校の特性や魅力に応じたまとまりから選択して履修。
 - ・高等学校においては、各学校の特性や魅力に応じて領域の選択を精選し、卒業後に少なくとも一つの運動やスポーツを継続することができるようにする。

3 指導内容の明確化に応じた指導法等の一層の工夫

- ・教材づくりの充実や学習資料の活用
- ・実生活で生かすことを重視し、「体づくり運動」の一層の充実
- ・基礎的な知識の確実な定着と、「体育理論」の一層の充実
- ・「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」のバランスのよい指導（「知識及び技能」以外の指導内容の指導機会の確保及び学習活動の工夫）

4 指導内容を適切に評価することができる評価方法等の工夫

- ① 指導と評価の計画の作成（指導と評価の機会、評価方法）
 - ・「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の評価場面を適切に設定し評価できるようにする。
- ② 観察、学習カード等の利用計画及び適切な頻度
 - ・指導後、「適切な時期に」「間をあけずに」複数回の評価機会を設定
- ③ 評価の妥当性、信頼性を高める工夫（教科会議等での事前の検討、共通理解）
- ④ 観点別学習状況評価の推進・・・活用可能で実効性のある評価規準の設定
- ⑤ 評価を指導に生かす視点の充実（PDCAサイクルの確立が大切）

5 言語活動の充実及びICT機器の活用

- ・各運動場面で、体を動かす機会を適切に確保した上で、「賞賛を送る」、「認め合う」、「互いに教え合う」などのコミュニケーションを図る学習活動の充実に取り組む。
- ・自己観察や他者観察などの学習場面で、よい動き方を見付けたり、ビデオなどの映像を通して、動き方の違いを比較したりすることで、自己の取り組むべき技術的な課題を明確にするなど、知識を実践的に活用する学習活動の充実を図る。
- ・主体的、協働的な学習の中からコミュニケーションを図る学習活動の充実に取り組む。